

想 続

生きがいについて

一般社団法人日本想続協会

代表理事・税理士 内田麻由子

あけましておめでとうございます。皆様とご家族のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。今月は「生きがい」について、3つの問い「何であるか」「どのようなものであるか」「何に似ているか」を柱に考えてみたいと思います。

☆ ~ ☆ ~ ☆

はじめに「生きがいとは何であるか」について考えます。皆様は、「あなたの生きがいは何ですか?」と聞かれたら、何とお答えになるでしょうか。「子どもの成長が私の生きがいです」「うーん。やっぱり仕事かなあ…」「趣味の〇〇をしている時には時間を忘れます」「仲間とのボランティア活動に生きがいを感じています」など、生きがいの対象は人それぞれでしょう。

同じ職場で仕事をしていても、使命感を持ち生き生きと働いている人もいれば、パンのために仕方なく働いている人もいます。毎日やるべきことをこなすだけで精いっぱい、生きがいについてゆっくり考える時間などなかなか持てないかもしれません。

何を生きがいとするか、またそもそも生きがいを持つか持たないかは、まったくの自由です。ただひとついえることは、生きがいとは、他人から与えられるものではなく、「自ら見いだすもの」だということです。メーテルリンクの「青い鳥」ではないけれど、「私の生きがいはどこにあるのですか?」と、人に尋ねるわけにはいきません。「おまえの生きがいはこれだよ」と、親や教師から差し出してもらうこともできないのです。

以前の月刊想続で、幸せについて考えた時に、相田みつをの言葉「幸せはいつもじぶんのところがきめる」を紹介しました。生きがいについてもまた「生きがいはいつもじぶんのところがきめる」のではないのでしょうか。

☆ ~ ☆ ~ ☆

つぎに「生きがいとはどのようなものであるか」について考えます。生きがいの対象については、人それぞれでした。ではそれらに共通するもの、いわば生きがいの本質は何でしょうか。

私は、生きがいとは「他者の喜びを我が喜びとするもの」だと思います。たとえば、子育ては大変ですが、子どもの喜ぶ顔を見れば、大変な思いなどどこかへ飛んで行ってしまい、自分もただただ嬉しいのです。子どもが病気で苦しんでいれば、自分が代われるものなら代わってやりたいと思うのが親の心です。仕事でも、喜んでくださるお客様がいらっしゃるからこそ、日々の仕事に生きがいを感じて働くことができます。困っているお客様がいたら、何とかして解決の道を見つけようと知恵を絞ります。また趣味であっても、作品や発表を見て楽しんでくださる方がいるから、もっと精進しようと思うものです。

網の目がひとつだけでは存在し得ないように、人は他との縁によって生かされているのであり、一人では生きていけません。平素から、喜びも悲しみも他者と共感できる心の習慣がある人は、どんな小さなことにも生きがいを感じることはできるのではないのでしょうか。

☆ ～ ☆ ～ ☆

さいごに「生きがいは何に似ているか」について考えます。私は、生きがいとは「花のようなもの」だと思うのです。

花がなくても人は生きていけます。しかし一輪の花があるだけで、心に安らぎを感じることができます。同じように、生きがいがなくても人は生きていけますが、生きがいを持って毎日を暮らしたほうが、人生がより豊かになります。

野に咲く花は、誰が見ていても見ていなくても、ただひとすじに無心に咲いています。本当の生きがいを持っている人というのも、お金や名誉のためではなく、ただそのことをしたいからするのです。そこには作為も計算もありません。ただ無心にするのみです。

「この泥があればこそ咲く蓮の花」といわれるように、蓮の花は泥のなかで育って咲きます。私たちの生きがいもまた、逆境や困難のなかから生まれることの方が多いように思います。何もかも満ち足りた生活からは、おそらく生きがいを得るのは難しいのではないのでしょうか。

☆ ～ ☆ ～ ☆

「夜と霧」の著者・フランクルは「私たちが人生に生きる意味を問うのではなく、私たちは人生から生きる意味を問われている存在である」といいます。自分の置かれた場所で、自らの生きがいを見いだし、人の役に立てるご縁に感謝して、毎日を過ごしたいと思います。